都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 20，88-95頁，2018

◇研究展望◇

死と死別の社会学

進　藤　雄　三

はじめに

死を対象とした学術的研究は，学際性を元来持っている。生命活動の終焉を生命科学的観点から明らかにする研究もあれば，人文・社会科学的観点からなされる研究も存在している。死を対象として設定する包括的学術名称としては，デス・スタディーズ（Death Studies）[1] あるいは「死生学」（Thanatology）という用語が使用されてきており，主に医学・医療，とりわけ緩和医療・精神医療を中心として展開されてきた。この母体からすれば，「死と死別の社会学」という分野は社会科学の下位分野である社会学の内部における，そのさらなる一下位分野にすぎないということになる[2]。

しかし，いかなる学術研究も時代的制約から免れることはできない。デス・スタディーズあるいは死生学と総称される研究系列が学術的に認知されるにいたったのは，20 世紀中葉以降，とりわけ 1970 年代以降のことにすぎず，その制度化に先立つ 1955 年，この分野に置けるパイオニア的研究とされる「死のポルノグラフィー」論稿は，イギリスの社会学者であるゴーラーによって先鞭をつけられていた[3]。この論稿は，1970 年代以降の死に対する現代の人々の時代意識・社会意識に多大な影響を与えたアリエスの著作[4] に反響し，長期にわたって現代社会の特徴とされてきた「死のタブー視」命題の基点となった業績である。この意味において，デス・スタディーズの起点の一つは，社会学によってすえられたといっても過言ではない。

なぜ 20 世紀中葉以降の時期において，死を対象とする学術研究が歴史の前面に立ち現れるにいたったのか。単一の解答は困難ではあるが，1970 年代以降の展開をみる限り，先進諸国における人口構造の高齢化の進展と，「先端医療革命」[5] のインパクトがその主たる背景をなしてきたことは疑いえない。とはいえ，高齢化の進展と「先端医療革命」のインパクトは，当初それほど直接結びついていたとはいえない。しかし，「疾病構造の転換」と呼ばれる 20 世紀後半期に通底する長期的動向は，1970 年代から 1980 年代にかけて「死」の中心的年齢集団が子どもから高齢者へ，そして死亡場所が在宅から病院へとシフトする「病院化」の過程を次第に鮮明化してゆき，アリエスが現代社会の特徴として描き出す「死の医療化」の様相は，デス・スタディーズを背後で駆動する力となった。その問題意識はとりわけ 1990 年代のイギリスにおいて学術的にも実践的にも顕在化してくるが，その動向においても社会学者は中心的な役割を担っている。

このわずか 50 年ほどのデス・スタディーズの展開過程において，「死」あるいは「死別」を対象とした研究系列において社会学のプレゼンスは決して小さなものとはいえなかったし，現在 においてもその意義は重要性を増大させつつあると言うことができる。

以下では，1. 1960 年代から 1980 年代までの研究をアメリカを中心に概観した後，2. 1990 年代におけるイギリスの新しい動向を概括し，3. 日本における動向を論述した上で，4. 日本社会における死と死別社会学の展望を考察する。

1. アメリカにおける研究の展開：1960 年代から 1980 年代

1）1960 年代

アメリカにおける「死」を対象とした社会学者による先駆的業績としては，1930 年代から 40 年代にかけてのエリオット（T. D. Eliot）のものがあるとはいえ，「死」に対する社会科学的研究関心の拡がりという観点からいえば，1959 年に公刊されたファイフェル編の『死の意味するもの』（邦訳 1973）以降，とりわけキュブラー＝ロスによって 1969 年に出版された『死ぬ瞬間』のインパクトによるところが大きいとされる[6]。そのなかで，社会学者，とりわけ医療社会学者とされる研究者による著作が 1960 年代に刊行されている点が注目されるが，その前段階として 1965 年にゴーラーによって出版され

た *Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain*（邦訳名『死と悲しみの社会学』）のインパクトにまず言及しておかなければならない。遺族へのインタビューを核として描かれたこの著作は，死に対する実証的・経験的な社会学的研究の範例を示したという点においても，重要なアナウンスメント効果を持ったといえるだろう。

ゴーラーの著作が公刊された 1965 年，シカゴ学派の第二世代の代表格とされるグレイザーとストラウスは，*Awareness of Dying*（邦訳名『「死のアウェアネス理論」と看護』）を，そしてその 3 年後の 1968 年には続編と言うべき *Time for Dying* を公刊した[7]。そしてその間を縫うようにして，サドナウは *Passing on*（邦訳名『病院でつくられる死』）を出版した[8]。前者は相互作用論的観点から，患者－家族－医療者の認識文脈（awareness context）の相違，その相互の関係を参与観察の手法により実証的に明らかにした研究であり，後者は病院内における「死」の社会的な被構築性に関する，エスノメソドロジー的方法論に依拠した経験的研究である。両者はキュブラー＝ロスの『死ぬ瞬間』公刊に先駆けて，病院をフィールドとしつつ「死」を主題化した社会学的研究を生み出し，社会学の内部に「死」が経験的研究の対象として設定しうることを実証したと言える。なぜ 1960 年代において「死」の主題化ともいうべき状況がもたらされたのかについて，多様な要因が指摘されてきたが，この時期において共通に指摘され，かつ現在から見て最も基底的な長期的要因は，人口構造の高齢化とこれに伴う死の「病院化」にあったと言えるだろう[9]。死をめぐる社会学的研究の具体的なフィールドが「病院」であったことは偶然ではない。

2）1970 年代から 1980 年代

1970 年代は 1960 年代以前と比較するならば，社会科学全般においても，社会学自体においても「死」を対象とした研究が格段の発展を遂げる契機となった年代といえ，その動向は 80 年代においても持続する。その背景として言及すべき点は，高齢化と死亡場所の病院化という先に挙げた動向と並んで，1970 年代のアメリカはとりわけ「医療」が社会的に争点化した時代であったという点である[10]。1967 年の南アフリカにおける心臓移植を嚆矢として，アメリカという場所において顕在化した「先端医療革命」は，「脳死」という新しい死の観念を生み出すとともに，臓器移植，生殖医療などの先端的テクノロジーをめぐって，「生命倫理」あるいはバイオエシックスと呼ばれた学際的研究を要請するにいたった。1975 年から 76 年にかけて争われたいわゆるカレン裁判は，「医療における死」の問題を世界的規模において鮮明に明示し，その後の尊厳死・自然死の法制化をめぐる現在にいたる論争の基点となり，カルフォルニア州では 1977 年に「自然死法」（Natural Death Act）が制定された。キュブラー＝ロスの『死ぬ瞬間』のインパクトが，死にゆく者への直接的聞き取りという行為それ自体にあったとすれば，カレン判決のインパクトは「延命」を技術的に可能にした医療テクノロジーの時代におけるヒューマンな死とは何か，という問いを明示化した点にあると言えるだろう。こうした状況を背景に，死の脱医療化とも表すべきホスピス運動が徐々に進展するとともに，医療内部においてもその対応として「緩和医療」が制度化されてゆくことになる[11]。

1970 年代は，キュブラー＝ロスの著作のインパクトと，カレン裁判のインパクトを受けて，一般社会に「死」に対する社会的関心が飛躍的に高まった時代であるといえる。この時代が幕を開ける 1970 年という年に，*Sociology of Death*『死の社会学』というタイトルを冠した，恐らく英語文献における初めての著作[12]がヴァーノンによって公刊されたのは象徴的である。ヴァーノンの関心自体は，宗教と死との関連，シンボルと人間との関係という点にあり，当時の象徴的相互作用論の観点を採用したものとはいえ，葬儀，刑罰，戦争，芸術，そして悲嘆行動などの幅広いトピックを対象化しており，『死の社会学』の当時における経験的範囲を提示したという意味でその後の研究の土台を築いたと言える。

他方，組織面・制度面における二つの出来事にも言及しておくべき必要がある。一つは，アメリカにおいて 1950 年代から「死」の社会学的研究をリードしてきたフルトン（R. Fulton）を所長とする「デス・エデュケーションと死の研究のためのセンター」が，1969 年にミネソタ大学の社会学部に開設された点である。70 年代における「死」の学際的研究の中心的雑誌となる *Death Education* は，この延長線上に 1977 年に創刊されている。フルトンらによる編著 *Death and Dying*（1978）[13]もその成果の一つと言うことができる。他の一つは，アメリカ社会学会が 1975 年のセッションの一つに「死と死にゆくこと」（death and dying）を設定した点である。これを受ける形で，ロフランドは翌 1976 年に雑誌 *Urban Life* の一号を Toward a Sociology of Death and dying というタイトルのもとに特集号として編集した[14]。

こうした「死」を対象とした社会学的研究の進展状況を受けて，1980 年代にはテキストとしての範例性を備えた優れたテキストが公刊されるようになる。その中でも，1980 年に上梓されたチャーマッツによる *The Social Reality of Death* と，1989 年にカールによって著された *Endings: A Sociology of Death and Dying* の 2 著作を秀作としてここでは挙げておきたい[15]。

2. イギリスにおける新展開：1990 年代以降

1）1990 年代の展開と ‘end of life care’ の誕生

死を対象とする研究史において，1960 年代から 1980 年代にかけて，研究者，雑誌，テキスト，組織といった諸側面においてその中心をしめていたのはアメリカであった。その中心性は，現在にいたるまで大きく揺らぐことはないと評価しうるものの，1990 年代以降の研究史において注目に値する新たな動向がイギリスにおいて展開されるにいたった。

まず，テキストという観点から見てゆくと，1993 年にクラークによる *The Sociology of Death*，1996 年にはハワースとヤップによる *Contemporary Issues in the Sociology of Death, Dying and Disposal* が編著として上梓されている[16]。そして，単著としてはウォルターによって，*The Revival of Death* が 1994 年，*The Eclipse of Eternity* が 1996 年，さらに *On Bereavement* が 1999 年にそれぞれ出版され，シールも 1998 年に *Constructing Death* を公刊している[17]。また上述したハワースとヤップは 1996 年に，イギリスにおける死学研究の中心的雑誌の一つとなる *Mortality* を創刊している。

なぜ 90 年代のイギリスにおいて，こうした急速な展開が見られるようになったのか。ハワースは 2008 年に日本での招待講演において，移民の増加に伴う社会的・文化的・宗教的多様性の増大，死亡場所の病院化の進展，葬送儀礼における変化（土葬から火葬へ），悲嘆研究における変化と一般人の関心の高まり，の 4 点に言及している（ハワース，2008: 113-127）[18]。しかしこうした説明によっても，90 年代におけるイギリスにおける死を対象とした社会学的研究の興隆がすべて解読されたとはいえない。明確な説明は困難ではあるが，アメリカにおける高齢化と病院化の進展，先端医療革命のインパクト，キュブラー＝ロスの著作とカレン判決のインパクト，さらにアリエスの著作の英語版が 1980 年代に公刊されていたことなど，その強度と拡散の度合いに違いはあれ，これらが一定の共通の基盤を提供していたことは指摘できるだろう。この共通の要因に加えて，ここではイギリスにおける「医療」状況において，「患者第一主義」（patient first）と呼ばれる保健医療制度改革が 80 年代から 90 年代において押し進められていた点を挙げておく必要がある。この理念と原則は，病いの延長線上に不可避的に訪れる，終期の患者を含まざるをえないからである。‘terminal’ ではなく ‘end of life care’ と呼ばれるプログラムが NHS（National Health Service）によって正式に確立され（2004），現在にいたっている経緯は，「死」を対象とした研究史において，国家が「死」への体系的な対処への支援を明示化し，直接国民に語りかける形式を採用しているという点で，ゴーラー以来の「死のタブー視」が明確に打破されたと解しうるものであると言うことができるだろう[19]。

90 年代以降のイギリスにおける「死」研究の急速な進展の理由は必ずしも明確とはいえないとはいえ，90 年代のイギリスにおいて独特の熱気があったことは疑いがたく，この点は上掲したウォルターの 1994 年のタイトル『死の復興』（*The Revival of Death*）にも明瞭に示されている。21 世紀における NHS による end of life care プログラムの確立もまた，こうした 90 年代における研究関心の拡大を重要な背景としていたことは確かであると言える。

2）2000 年代以降

こうした長期的背景のもとに，イギリスにおける死の研究は 2000 年以降も着実に進展を見せる。その際に重要な役割を担ってきたのは，2005 年にバース大学に設立された「死と社会センター」（Center for Death and Society: CDAS）である。同センターは，国際会議を毎年 2 回主催し，また雑誌 *Mortality* の発行元となっており[20]，70 年代のアメリカにおいてフルトンによって創設された「デス・エデュケーションと死の研究のためのセンター」と類似した役割を，2000 年代以降のイギリスにおいて果たしていると言える。

また著作に関しては，編著として 2001 年に公刊されたホッキーらによる悲嘆に関する包括的な著作，*Grief, Mourning and Death Ritual*，及びミッチェルによる 2007 年の *Remember Me?*，また単著としてはハワースによる 2007 年の *Death and Dying*，ヴァレンティンによる 2008 年の *Bereavement Narratives* などが挙げられる[21]。

3. 日本社会における動向

1）1970 年代から 90 年代

20 世紀後半期の日本社会において，「死」の研究と密接に関わる動向は，まず Death studies あるいは Thanatology という名称によって概括される研究動向の導入という形式をとる。その始点はおよそ 1970 年代後半期以降からである。カレン裁判と時期を同じくして 1976 年には日本安楽死協会が発足（1983 年に尊厳死協会に会名変更）し，ホスピス・ケアの日本へ導入と，「日本死の臨床研究会」の発足はほぼ同時期の 1977 年であった。1980 年代には上智大学を舞台に日本版の「デスエデュケーション」が「生と死を考えるセミナー」の一環として開始され，同時に仏教界において「ビハーラ」

の理念が提唱され，1987年には仏教ホスピスの会が設立された。また1995年には日本臨床死生学会が結成され，また市民運動として「葬送の自由をすすめる会」が1991年に設立されている[22]。

こうした動向，とりわけ1980年代から90年代にかけての動向において，一般社会に「死」に対する態度・意識という点で大きな影響を与えていたのは「脳死」をめぐる問題であり，「脳死臨調」（臨時脳死及び臓器移植調査会1989）から「臓器の移植に関する法律」公布（1997）にいたる経緯である[23]。脳死観念の社会的受容という要因が，「死」に対する社会的意識に多大な影響を与えたという事実自体が，日本社会における近年の死をめぐる動向の特徴であったと言える。

他方，「死」に対する研究の導入という観点からいえば，1970年代においてキュブラー＝ロスの『死ぬ瞬間』が1971年，ファイフェル編の『死の意味するもの』が1973年，フルトン編の『デス・エデュケーション』が1978年に先駆的に翻訳されてはいるが，「死」研究の基本書ともいうべきアリエスの『死と歴史』は1983年，『死を前にした人間』は1990年，ゴーラーの『死と悲しみの社会学』が1986年，死の社会学の先駆的基本書であるグレイザー＝ストラウスの『「死のアウェアネス理論」と看護』は1988年，サドナウの『病院でつくられる死』は1992年，エリアスによる『死にゆく者の孤独』[24]は1990年と，欧米における研究の導入には10年から20年ほどのタイムラグがあったことが伺える。

この時期において「死」を主題とした社会学者による著作は希であり，例外的にゴーラーの著作の訳者である宇都宮による『生と死の宗教社会学』（1989），および石川による『死の社会心理』（1990）がかろうじて挙げられるにすぎない[25]。

2）2000年代以降

こうした状況は21世紀に入って大きく変容する。まず書籍情報から確認してゆくと，2001年には副田によって，初めて「死の社会学」をその表題に掲げた編著『死の社会学』が公刊され，2007年には樽川による編著『喪失と生存の社会学』が上梓される[26]。また単著としては2005年に澤井による『死と死別の社会学』，2006年に中筋による『死の文化の比較社会学』，2008年には立岩による『良い死』が立て続けに公刊されており，英語ではあるが日本人研究者による日本社会における葬祭産業，死と死別をめぐる社会状況の著作も著されている[27]。さらに近年では，槇村による単著『お墓の社会学』が2013年，澤井・有末による編著『死別の社会学』が2015年，田代による単著『死にゆく過程を生きる』が2016年に出版されている[28]。

書籍に限定してみても，2000年代における「死の社会学」に包摂しうる業績の出版数は，過去数十年に比しても大幅に増加していると言える。この潮流の延長線上に，2012年，日本社会学会はその機関誌『社会学評論』の「テーマ別研究動向」の一つとして初めて「死の社会学」を取り上げ，上記の澤井（2005），中筋（2006），立岩（2008）の三つの著作がリストアップされるにいたった[29]。「死の社会学」あるいは「死と死別の社会学」が独立分野として日本社会学の中で，公的に認知された事柄であったと言いうるだろう。

なぜ2000年代以降において，という問いに対しても明確な説明は困難である。長期的な高齢化と病院化を背景に，70年代から90年代のアメリカ・イギリスなどの影響を受けつつ，日本において漸く社会学内部自体に，研究関心の活性化が見られるにいたったという記述以上のことを語ることはむつかしい。しかし，とりわけ2010年代以降に関しては，「死」に関する日本社会の意識の覚醒とでも表現すべき事態に直接関連する，二つの事柄に言及しておくこと必要がある。一つは，「終活」という言葉の誕生であり，他の一つは「尊厳死」法制化の動向である。

「終活」という言葉は，2009年の『週間朝日』の連載に始まるとされ，2010年に新語・流行語大賞にノミネートされ，2012年にはトップテン入りを果たし，同2012年には北海道でエンディング総合支援サポートの会が発足し，2015年には終活ジャパン協会として法人化された。90年代に発足した「葬送の自由を進める会」も法人化して現在にいたるまでに複数の書籍を刊行しており，また阪神・淡路大震災後に注目されるにいたった「孤独死」問題は，2010年のNHKによる「無縁社会」キャンペーンを契機に，「無縁死」という造語とともに21世紀日本社会における「死」の社会問題化に一石を投じた[30]。こうした動向は，4人に1人が65歳以上という「超高齢化」社会のリアリティの現実化を背景にしていることは疑えないだろう。

他方，「尊厳死」の法制化の試みは，直接的には超党派による議員立法という形式において2012年に始まり，2014年以降国会への提出を企図しつつ，現在にいたるまで法制化にはいたっていないが，医療現場における「蘇生措置拒否」（DNR），および胃ろう・人工栄養・人工呼吸器の取り外しをめぐる問題を背景とした動向である。特に，2008年に末期がん患者7名の人工呼吸器を外した行為に対して殺人容疑で書類送検された富山県射水病院の事例が，法整備の必要性を後押ししたと言われ，延命措置の中止を可能とし，かつその場合の医師の法的免責の明示を内容の中核としている[31]。この法案は1980年代から90年代にかけての脳死・臓器移植問題のようにメディアで一般にオープン化されることなく，広く社会に知られる前の段階で，賛否表明がなされるという経

緯を示しており，社会的認知という点においてどれほどの拡がりを持ち得たかに関しては，判断を下すことが困難であるが，この動向は「医療における死」という現実を起点としていることを確認しておく必要がある[32]。

2000 年代以降の日本社会において，それ以前の問題を継承しつつ，人口構造の高齢化の一層の進展を経て，その先にある死の予備軍の確実な増加，そして死の病院化，医療における死の現実を受けて，「死」が社会において日常化してきた様相が伺えるといえるだろう。

4. 日本社会における「死と死別の社会学」：展望

1)「死と死別の社会学」とデス・スタディーズ

日本社会において，「死と死別の社会学」という分野を考察する場合，その母体ともいうべきデス・スタディーズ，とりわけ「死生学」との関係を整理しておく必要がある。端的に表現すれば，後者の用語は「医学」とりわけ緩和医療・精神医療を中心に展開され，社会科学のなかでは心理学が主柱をなしてきたと言うことができる[33]。この母体の全体からすれば「死と死別の社会学」は，量的にみればごく微細な小片をなすに過ぎない。しかし，ゴーラーからアリエスにいたる「死のタブー視」命題は，20 世紀において人的・経済的な巨大セクターに成長した「医療」を包摂する現代社会の位相を明示し，とりわけ英語文化圏ではホスピス運動を駆動力としつつ，1990 年代以降の「死の再興」と呼びうる反転現象の起点をなしたと言える。21 世紀の日本においても，1990 年代以降のイギリスにおいて生起した現象と類比可能な事象が，特に 2000 年以降観察されるようになってきたと言えるだろう。

それでは日本社会における「死生学」と「死と死別の社会学」との関係はどう考えるべきか。20 世紀における死の社会的処遇の中心の場が「病院」となったかぎりにおいて，医学・医療が「死生学」の中心を占めることには必然性がある。しかし，日本における「死生学」の中心は，医療・医学と密接な関係を持ちながらも，医療・福祉内部では「死別の悲嘆」への対処，教育との関連としては「デスエデュケーション」の教科目としての性格が強かったと言え，その中への社会学の参与は希薄であり続けた[34]。21 世紀以降の展開のなかで，「死と死別の社会学」に分類可能な書籍や論文が増大したことは事実であるが，標準的なテキスト，専門雑誌，学会構成，研究所・センター設立といった制度的・組織的基盤は依然として脆弱な状態にとどまっている。この領域において，内堀・山下による『死の人類学』（1986），波平による『病いと死の文化』（1990）『日本人の死のかたち』（2004）など隣接領域として先行してきた人類学，あるいはまた民族学における『葬送文化論』（1993），歴史学における『火葬の文化』（1990）『墓と葬送の社会史』（1993），新村による『死と病いと看護の社会史』（1989）『老いと看取りの社会史』（1991）『医療化社会の文化誌』（1998）『在宅死の時代』（2001）などに比しても，社会学のプレゼンスは高いとは言えない[35]。

2)「死と死別の社会学」展望

最後に，日本における「死と死別の社会学」に関して，近年における主要な業績を概観した上で，今後の展望を考察したい。

まず，近年の研究の特徴として，その具体的対象が「死別」と「葬送」に限定されているかに思われる点でが挙げられる。たとえば日本におけるパイオニア的な編著『死の社会学』（2001）に収録された論稿は，がんの告知・死別体験（3 本），震災の体験と死別体験（2 本），子どもの死別体験（2 本）となっており，澤井・有末による『死別の社会学』（2015）も，「死別の社会学の理論的構造」「家族関係のなかの死別」「死別体験の社会的様相」「社会現象としての死別」の 4 部構成をとり，その経験的対象の中心は死別体験の聞き取りである[36]。また，英語文献であるが，Suzuki による *The Price of Death*（2001）は日本における葬儀産業の研究書であり，中筋の『死の文化の比較社会学』2006）もスーダン，中国，アメリカ，日本 4 カ国の葬送儀礼を対象とし，槇村の『お墓の社会学』（2013）は，葬送儀礼および人々の意識を「墓」に焦点化した研究と言える。「死と死別の社会学」のなかで，「死別」と「葬送」が研究対象として分かりやすく，また当事者へのアクセスも比較的容易であるという点，さらに相対的にこの二つの領域は先行研究がかなり蓄積されているという点から，こうした傾向は理解可能ではある。しかし，死あるいは死にゆく過程には，より広範な「社会的」次元がある。具体的には，武川と西平が「社会構造と死」と呼んだ次元[37]，たとえば戦争・革命というマクロな制約下での死，あるいは特定の福祉国家体制，医療・福祉・家族システムという制度的条件下での死という主題，さらには死に携わる多様な職種 —— 医療・福祉従事者，法医学者・検死官，納棺師，エンバーマー，葬儀ディレクター，宗教者 —— の仕事といった主題（労働社会学・職業社会学の主題とも重なる）などが挙げられるだろうし，水子や過労死といった日本的とされる事象の研究もまたなされるべき対象だろう[38]。

日本における「死と死別の社会学」は，田代の指摘する「病院死の一般化」「延命治療への疑念」「死の予見可能性」状況[39]がある限り，実践的・学術的な進展を期待することができるし，その要請もあると想定される。

しかし，「死と死別」を包括的な観点から社会学的にとらえるという観点から言えば，上記で指摘した点以外にも，研究対象の主題化から排除されてしまう事項がかなりあるのではないかという危惧も感じられる。そうした事態を免れるには，「死と死別の社会学」の包括的な輪郭が描かれる必要がある。武川・西平は日本の死生学が生成途上であり，「講座や教科書が執筆される段階にない」（武川・西平，2008:6）と述べているが，「死と死別の社会学」に関しても状況は変わっていない。英語圏では複数の標準的テキストを挙げることができるが，それでも著者の個性と問題意識が主題を限定していると見受けられる。この輪郭を範例的に示すという点において，これまでに出版された学術的書籍のなかで，最も包括的かつ社会学的志向性が顕著な「死と死別」を対象とした社会科学的書籍として，ブライアント編の *Handbook of Death and Dying*（2003）[40] を挙げておきたい。その内容は，10 部から構成 —— 比較文化における死，社会的文脈における死とその意味，論争的な死（自殺・死刑・中絶・安楽死），死にゆく過程，葬送，身体の処置，喪と悲嘆，法的側面，芸術における死 —— されており，死をめぐる「社会的」側面が包括的に提示されている。

注

1．この言葉は，直接的には 1985 年以降に名称を変えた同名の雑誌名に由来する。歴史的には，この雑誌は *Death Education*（1977-1984）の後継誌であり，「先端医療革命」のインパクトの事後に創出された経緯を持つ。

2．とはいえ，「死の社会学」あるいは「死と死別の社会学」というカテゴリーは，社会学の内部においても必ずしも制度化された下位分野として確立されているわけではない。日本社会学の 31 の専攻分類の中に含まれてはいないし，国際社会学会（ISA），アメリカ社会学会の分類においても，単独の分類項目としては掲示されていない。

3．引用参考文献（英語）1. の書誌情報を参照。

4．引用参考文献（英語）2.3. の書誌情報を参照。

5．この表現は，1970 年代におけるアメリカの医療事情を考察した米本（1988）（引用参考文献（日本語）1.）の表現である。

6．1950 年代までのアメリカにおける「死」を対象とした先駆的研究の詳細に関しては，石川(1990)（引用参考文献（日本語）書誌情報 2.）を参照。ファイフェル編著，キュブラー＝ロスの著作については引用参考文献 4.5. を参照。

7．引用参考文献（英語）6.7. を参照。

8．引用参考文献（英語）8. を参照。

9．この点に関しては，石川(1990)（引用参考文献（日本語）2.，16 頁，18 頁を参照。

10. イリイチの『脱病院化社会』(1976=1979）がベストセラーとなり，カールソンによって『医療の終焉』*The End of Medicine*（1976）というタイトルの著作まで公刊されるにいたった当時の医療に対する社会的意識を，社会学者スターは「治療ニヒリズム」と表現している（Starr, 1989: 408　引用参考文献（英語）9.）。

11. ホスピス，および緩和医療の歴史的展開に関しては引用参考文献（英語）10. を参照。

12. 引用参考文献（英語）11.を参照。

13. 引用参考文献（英語）12.を参照。なお，death and dying の直訳は「死と死にゆくこと」であり，dying 研究は大別して死にゆく人々を対象としたものと，遺された人々を対象としたものに二分される。「死別」に該当する英語は bereavement が通常あてられるが，この言葉は主に遺された人々の悲嘆とその支援を企図した研究に限定して使用されてきた。しかし，研究の量的拡がりの観点，言葉の流通度からすると，「死と死別」という用語が現在では主流をなしており，タイトルではこの日本語を採用した。

14. 引用参考文献（英語）13. を参照。

15. 引用参考文献（英語）14.15. を参照。なお，この二つのテキストの内容に関しては，進藤（2015）で概略を提示している。

16. 引用参考文献（英語）16.17. を参照。

17. 引用参考文献（英語）18.19.20.21. を参照。

18. 引用参考文献（日本語）4. を参照。

19. 現在の NHS に end od life care の内容については，http://www.nhs.uk/Planners/end-of-life-care/Pages/what-is-end-of-life-care.aspx　から閲覧できる（2017 年 8 月 30 日閲覧）。また，「死のタブー視」が覆されたという表現に関しては，NHS と密接な関係のもとに緩和医療協会（NCPC）が 2009 年に立ち上げた Dying Matters という連合組織が，その使命として掲げる以下の文言に集約されていると見ることができる。

「この連合体の使命は，人々が，死にゆくこと，死と死別についてよりオープンに語り，人生の終期に対して計画を立てる支援を行うことにある。このことは，死にゆくこと，死と死別が日常的なライフサイクルの自然な出来事とみなされ，受容される社会への根本的な変化を含意することになる。」（http://www.dyingmatters.org/overview/about-us より）

20. 引用参考文献（日本語）4. を参照。

21. 引用参考文献（英語）22.23.24.25. を参照。

22. 引用参考文献（日本語）5. を参照。

23. この時期に社会に流布した代表的な著作としては 80 年代では中島みち『見えない死』（文芸春秋 1985），立花隆の『脳死』（中央公論 1986），1990 年代では柳田邦男の『犠牲：わが息子・脳死の 11 日』（文芸春秋 1995）などがある。脳死・臓器移植を直接対象とした，社会学者による単独の著作としては櫛島次郎『脳死・臓器移植と日本社会』（1991　引用参考文献（日本語）10.）。また，ホスピスに関わる書籍としては，現役医師による山崎章郎『病院で死ぬということ』（主婦の友社 1990）が挙げられる。

24. 引用参考文献（英語）26. を参照。

25. 引用参考文献（日本語）2.6. を参照。なお，石川による 2. の著作は，少なくとも 1990 年以前のアメリカにおける「死」の人文社会科学的研究に関する，最も詳細かつ包括的な紹介の書籍として，この分野における基本書と評すべき内容を備えている。社会学者による「死」を対象とした貴重な先駆的研究としては，『世紀の遺書』の内容分析により戦犯受刑者の死生観を考察した作田（1960, 1967　引用参考文献（日本語）7.8.）は，その後森岡（1993 引用参考文献（日本語）9.）および副田（2001　引用参考文献（日本語）11.）へと連なっている。この研究に連なる隣接的研究としてパンゲによる『自死の日本史』（筑摩書房 1984=1986）および，大貫による『ねじ曲げられた桜』（岩波書店 2003）『学徒兵の精神誌』（岩波書店 2006）がある。

26. 引用参考文献（日本語）12.13. 参照。なお，副田には『死者に語る：弔辞の社会学』（ちくま新書：2003）の著作もあり，「死の社会学」の一領域の仕事と言える。

27. 引用参考文献（日本語）14.15.16. および，引用参考文献（英語）27.28 を参照。

28. 引用参考文献（日本語）17.18.19. を参照。

29. 引用参考文献（日本語）20. を参照。

30. 引用参考文献（日本語）21. を参照。

31. 引用参考文献（日本尾）22. を参照。

32. 尊厳死法案をめぐる経緯，および賛否それぞれの論点については引用参考文献（日本語）23. を参照。また，2010 年には医師の石飛の『「平穏死」のすすめ』（講談社）に由来する，「平穏死」という言葉が一定の流通度を持った点も指摘しておきたい。
33. この点に関してはたとえば，1959 年のファイフェルの編著（引用参考文献（英語）4.）と，1978 年のフルトンの編著（引用参考文献（英語）12.）の，執筆者構成を比較した石川の著作（石川 1990: 57-63　引用参考文献（日本語）2.）を参照。
34. 引用参考文献（日本語）4.24 を参照。なお，この東京大学出版による死生学全 5 巻のうち，社会学者が中心として編まれているのは第 3 巻である。
35. 引用参考文献（日本語）25.26.27.28.29.30 および 31.～34. を参照。
36. こうした中で，田代の『死にゆく過程を生きる』（2016 引用参考文献（日本語）16.）は，遺された者ではなく，死にゆく当事者を対象とした，死にゆく過程それ事態を対象として経験分析である，という点で非常にユニークな研究書と言える。
37. 引用参考文献（日本語）35.2 頁。
38. 武川・西平が言及しているのは，戦争・革命，環境破壊・大量貧困などの事例であり，福祉国家以降の事例は論者の考える事例である。この点に関しては，進藤（2015　引用参考文献（日本語）3.）を参照。また，自殺・自死をめぐるトピックは，死の社会学的研究の主要トピックと言いうるが，社会病理・逸脱領域で伝統的に扱われてきた主題であり，今回の論稿では紙幅の都合上割愛している。
39. 引用参考文献（日本語）19. 序章。
40. 引用参考文献（英語）29.

引用参考文献

【英語文献】
1. Gorer, G., 1955 'The Pornography of Death' *Encounter*: 49-52 in 1965 *Death, Grief, and Mourning in Contemporary Britain,* London: Cresset Press=1986 宇都宮輝夫訳『死と悲しみの社会学』ヨルダン社
2. Ariès, P., 1975 *Essais sur l'histoire de la mort en Occident*, Paris: Seuil=1983 伊藤晃・成瀬駒男訳『死と歴史：西欧中世から現代へ』みすず書房
3. Ariès, P., 1977 *L'Homme devant la mort*, Paris: Seuil=1981 *The Hour of our death*, Knopf=1990 成瀬駒男訳『死を前にした人間』みすず書房
4. Feife, H.,（ed）. 1959 *The Meaning of Death in American Society*, New York: McGraw Hill=1973 大原健士郎他訳『死の意味するもの』岩崎学術出版
5. Kübler-Ross, E., 1969 On Death and Dying, New York: Simon & Schuster/Touchstone=1971　川口正吉訳『死ぬ瞬間』読売新聞社
6. Glaser, B. G. & A. L. Strauss, 1965 *Awareness of Dying*, New York: Aldine=1988 木下康仁訳『「死のアウェアネス理論」と看護』医学書院
7. Glaser, B. G. & A. L. Strauss,, 1968 *Time for Dying*. New York: Aldine
8. Sudnow, D., 1967 *Passing on*, Prentice-Hall=1992　岩田啓靖他訳『病院でつくられる死』せりか書房
9. Starr, P., 1982 *The Social Transformation of American Medicine*, New York: Basic Books
10. Woods, S., 2013 '"The 'Good Death', Palliative Care," in Hagger, L. & Woods, S.,（eds.）, *A Good Death?*. London: Routledge
11. Vernon, G. M., 1970 *Sociology of Death*, Los Angeles: Ronald Press,
12. Fulton, R., et al.（eds.）, 1978 *Death and Dying*, Boston: Addison Wesley=1984　斉藤武・若林一美訳『デス・エデュケーション』現代出版
13. Lofland, L. H.,（ed.）, 1978 "Toward a Sociology of Death and dying", *Urban Life* vol. 4 No. 3
14. Charmatz, K., 1980 *The social Realty of Death*, Boston: Addison Wesley
15. Keral, M. C., 1989 *Endings: A Sociology of Death and Dying*, Oxford: Oxford University Press
16. Clark, D.,（ed.）, 1993 *The Sociology of Death*, Oxford: Blackwell
17. Howarth, G. & Jupp, P. C.（eds.）, 1996 *Contemporary Issues in the Sociology of Death, Dying and Disposal*, London: Macmillan
18. Walter, T., 1994 *The Revival of Death*, London: Routledge
19. Walter, T., 1996 *The Eclipse of Eternity*, London: Macmillan
20. Walter, T., 1999 *On Bereavement*, Open University Press
21. Seale, C., 1998 *On Bereavement*, Cambridge: Cambridge University Press
22. Hockey, J. et al.（eds.）, 2001 *Grief, Mourning and Death Ritual*, Open University Press
23. Mitchell, M., 2007 *Remember Me?*, Oxford: Taylor & Francis
24. Howarth, G., 2007 *Death and Dying*, Cambridge: Polity Press
25. Valentine, C., 2008 *Bereavement Narratives*, London: Routledge
26. Elias, N., 1985, 2001 *Loneliness of Dying and Human Condition*, London: Bloomsbury=1990 中居実訳『死にゆく者の孤独』法政大学出版
27. Suzuki, H. 2001 *The Price of Death: The Funeral Industry in Contemporary Japan*, Redwood: Stanford University Press
28. Suzuki, H., ed. 2013 *Death and Dying in Contemporary Japan,* London: Routledge
29. Bryant, C. D. editor in chief, 2003 *Handbook of Death and Dying* 2vols., London: Sage Publications

【日本語文献】
1. 米本昌平，1988『先端医療革命』中公新書
2. 石川弘義，1990『死の社会心理』金子書房
3. 進藤雄三，2015「死の社会学的研究に向けて」『人文研究』第 66 巻，pp. 211-222
4. ハワース，G.，2008 伊達聖伸・伊達史恵訳「英国における死生学の展開」島園進・竹内整一編『死生学とは何か』（死生学第 1 巻）所収，東京大学出版
5. 島園進，2008「死生学とは何か」島園進・竹内整一編『死生学とは何か』（死生学第 1 巻）所収，東京大学出版
6. 宇都宮輝夫，1989『生と死の宗教社会学』ヨルダン社
7. 作田啓一，1960「戦犯受刑者の死生観」『ソシオロジ』第 24 号，『価値の社会学』岩波書店 1973　所収
8. 作田啓一，1967「死と和解」『恥の文化再考』筑摩書房
9. 森岡清美，1993『決死の世代と遺書』（補訂版）吉川弘文館
10. 櫛島次郎，1991『脳死・臓器移植と日本社会』弘文堂
11. 副田義也，2001「死者とのつながり」副田義也編『死の社会学』岩波書店
12. 副田義也編，2001『死の社会学』岩波書店
13. 樽川典子編，2007『喪失と生存の社会学』有信堂高文社
14. 澤井 敦，2005『死と死別の社会学』青弓社
15. 中筋由起子，2006『死の文化の比較社会学』梓出版社

16. 立岩真也, 2008『良い死』筑摩書房
17. 槇村久子, 2013『お墓の社会学』晃洋書房
18. 澤井敦・有末賢編, 2015『死別の社会学』青弓社
19. 田代志門, 2016『死にゆく過程を生きる』世界思想社
20. 株本千鶴, 2012「テーマ別研究動向（死の社会学）」『社会学評論』第 63 巻第 2 号, pp. 302-311
21. 小辻寿規・小林宗之, 2011「孤独死報道の歴史」『Core Ethics』Vol. 7
22. 樋口範雄, 2015「終末期医療と法」『医療と社会』Vol. 25 No. 1
23. 立岩真也, 2017『生死の語り行い 2』Kyoto Books
24. 武川正吾, 2008「生と死の社会学」武川正吾・西平直編, 2008『ライフサイクルと死』（死生学第 3 巻）所収　東京大学出版
25. 内堀基光・山下晋司, 1986『死の人類学』弘文堂
26. 波平恵美子, 1990『病いと死の文化』朝日新聞社
27. 波平恵美子, 2004『日本人の死のかたち』朝日新聞社
28. 葬送文化研究会編, 1993『葬送文化論』古今書院
29. 鯖田豊之, 1990『火葬の文化』新潮選書
30. 森　謙二　1993『墓と葬送の社会史』講談社（2014 年に吉川弘文館から再発行）
31. 新村拓, 1989『死と病と看護の社会史』法政大学出版局
32. 新村拓, 1991『老いと看取りの社会史』法政大学出版局
33. 新村拓, 1998『医療化社会の文化誌』法政大学出版局
34. 新村拓, 2001『在宅死の時代』法政大学出版局 2001
35. 武川正吾・西平直, 2008「はじめに」武川正吾・西平直編,『ライフサイクルと死』（死生学第 3 巻）所収　東京大学出版